

I-2 南部柑橘・茶農業地域

I-3 南部柑橘・水田・畑作農業地域

II 山間部農業地域

II-1 山間部柑橘農業地域

II-2 山間部柑橘・畑作農業地域

III 北部農業地域

III-1 北部水田・畑作・畜農業地域

III-2 北部水田・畑作農業地域

地域差を齎らす要因としては、1) 気温、2) 地形、3) 交通の便(位置)、4) 他産業との関係、5) 農業技術等の指導等が掲げられる。然し、何れにしても本地域は岳南工業地帯の西縁に位置する為に、兼業指向性が強く、この事は農業構造の弱体化を齎らしている。

綿スフ工業を中心にみた地域研究

～ 特に貝塚市を調査対象として

畑 野 邦 子

調査対象地である貝塚市は大阪湾の東岸に位し、大阪市とは20Km、和歌山市とは30Kmの地点に位置している。この地域は「和泉木綿」の名で知られる頃から泉州機業地の一かくとして発展し、現在では市の平野部、丘陵部を中心に多くの綿スフ工業の中小工場が地域企業集団を形成している。かかる地域を対象とする研究の中心課題は、(1)綿スフ工業が地域の中で如何に発展し、特に最近10年間「高度成長経済」下で如何なる動向を示しているか、(2)綿スフ工業が如何に地域の中で展開し、更に背景となる地域構造が如何に変化しつつあるか、この二点に設定し、論文内容を次の様な構成とした。

第1章 調査対象地の地域概観

(1) 位置及び沿革 (2) 地形と土地利用 (3) 農業の動向 (4) 人口

第2章 貝塚市における綿スフ工業の変遷

(1) 綿買い商人と機織農家 (2) 力織機工場の出現と賃労働者の形成 (3) 第一次大戦を契機とした本格的展開 (4) 戦後統制時代 (5) 第二次大戦後の復旧と30年迄の変遷

第3章 「高度成長経済」下での綿スフ工業の動向

- (1) 最近10年間の動向 (2) 綿スフ工業の生産構造 (3) 労働市場と労働問題

第4章 綿スフ工業の地域的展開と地域構造 — 特に水間地区を中心として

- (1) 調査対象地の選択理由と概観 (2) 各集落の地域構造 (3) 各集落における独自の地域的展開

以上である。要約すると、最近10年間、実質的には倍近くの工場の増加がみられ、特に平地部において農業から織布工業者に転業した例が大部分を占める。元来綿スフ工業は農村における家内工業として出発したものであり、常に農業と密接なかわりあいをもって発達してきた。最近の転業の原因としては、玉葱価格の不安定性により農業経営自体安定性がなく、7反～1町歩あたりの農地所有者が最も多い事からもその生活の不安定性がわかる。この地域の農業は大阪をひかえ商品作物としてのミカン・蔦が大きな位置をしめているが、蔦は労働集約を必要とする事から栽培する農家が限られ、一方では専門化の方向もみられる。農業から転業した最近の織布工業者は綿スフ工業の生産構造の底辺に位し、大抵の場合同地域の大工場の下請をしている。ここで綿スフの特色として、タオル・毛布工業が非常に零細で経営が不安定の際農業に戻るといふ流動性をもつものに対し、規模が大きく、農業と工業を兼営している場合も従事している人間は異なっており、農地は単に工業経営の際に信用問題としての意味をもつ程度であるともいえる。各集落においては綿スフ工業の資本の性格が大きく地域にも作用しているともいえるし、農村としての性格が逆に資本にも反映しているといえる。具体的には地元労働力の占める割合で考察したのであるが、資本と農業集落の間には大体相関関係がみられる。

又、最近の傾向として益々地元労働力の割合は減じ、九州・四国を労働市場としているが、若年労働者の不足は織布工業者にとって最も大きな経営上のあいりとなり、その為に九州への企業の進出もみられる。

生産構造においては多数の零細企業がその裾野となり近代化された少数の大紡績工場を頂点とするピラミッド型を構成し、現在、原糸メーカーのカルテル化によりその優位性は益々加わり工場の間でも系列化と非系列化工場の格差が生じ、複雑に階層分化しているといえる。